

東京農大教員 三大賞

東京農大貢献賞 ■ ベストティーチャー賞 ■ ベストレクチャー賞 (※ 職位は受賞時)

2020

松林尚志 教授 (生物資源開発学科)
鈴木敏弘 助教 (醸造科学科)
尾畑やよい 教授 (バイオサイエンス学科)
浅井俊光 准教授 (地域創成科学科)
望月洋孝 助教 (国際食農科学科)
下井岳 准教授 (北方園農科学科)

相馬幸作 教授 (北方園農科学科)

2019

増田宏司 教授 (動物科学科)
服部一夫 教授 (栄養科学科)
矢島新 教授 (分子生命科学科)
田中恵 准教授 (森林総合科学科)
田中裕人 教授 (食料環境経済科学科)
大久保倫子 助教 (北方園農科学科)

江口文陽 教授 (森林総合科学科)

2018

平野繁 准教授 (農学科)
齋藤彰宏 助教 (農芸化学科)
中村進一 教授 (バイオサイエンス学科)
服部勉 教授 (造園科学科)
中曽根勝重 准教授 (国際農業開発科学科)
寺澤和彦 教授 (北方園農科学科)
實野雅太 助教 (教職課程)

松林尚志 教授 (生物資源開発学科)

2017

尾畑やよい 教授 (バイオサイエンス学科)

受賞者一覧

2020

受賞者8人が決まる

農大貢献賞／ベストティーチャー賞／ベストレクチャー賞

東京農大貢献賞、ベストティーチャー賞、ベストレクチャー賞は、本学教員の実績や成果を東京農大として評価・表彰するもので、本学教員の「三大賞」と言える。今年度もその受賞者8人が決まった。例年、その表彰はホームカミングデーを舞台に行われていたが、今年度はコロナ禍でイベント全般が中止となった。そこで、今年度の受賞者を広く紹介する機会としての「紙上表彰式」を本特別号で催したい。(2・3面に関連記事／今年度の8人と、これまでの受賞者は左表参照)

本学は「農」の学びと実践を通して社会に寄与する人材に依っている。積み重ねた実績と成果が東に、優れた教育と、それ京農大の盛名を増している。

本学は「農」の学びと実践を通して社会に寄与する人材に依っている。積み重ねた実績と成果が東に、優れた教育と、それ京農大の盛名を増している。

東京農大貢献賞

本学の名声を著しく高めていくことに貢献した教員を表彰するのが「東京農大貢献賞」である。本学が創設されたのが東京農大25周年となった記念の年(2017)に始まり、今年で4年目となる。

それまでは大学の内部に留まっていた表彰の制度がなかった。そこで、教育研究の推進に貢献した人、社会的に貢献した人、大学が自ら評価・表彰しようと創設された賞である。各分野で活躍している教員の

大貢献賞(以下、農大貢献賞)である。本学が創設されたのが東京農大25周年となった記念の年(2017)に始まり、今年で4年目となる。

高野学長はこの賞について、「農大貢献賞を受賞された方には、今後も教育・研究において社会的な貢献につながる活躍を期待したい。また、後進の育成にも力を入れ、次の世代へと繋げていってほしい」と受賞者に期待を寄せる。

ベストティーチャー賞

「食料」「環境」「健康」「バイオマス」「エネルギー」の5分野を教育研究活動における挑戦領域として位置づけ、研究と社会貢献に積極的に取り組んでいる。外部からだけでなく、内部からも本学教員のさまざまな実績を

ベストレクチャー賞

「食料」「環境」「健康」「バイオマス」「エネルギー」の5分野を教育研究活動における挑戦領域として位置づけ、研究と社会貢献に積極的に取り組んでいる。外部からだけでなく、内部からも本学教員のさまざまな実績を

ベストティーチャー賞

「食料」「環境」「健康」「バイオマス」「エネルギー」の5分野を教育研究活動における挑戦領域として位置づけ、研究と社会貢献に積極的に取り組んでいる。外部からだけでなく、内部からも本学教員のさまざまな実績を

ベストレクチャー賞

「食料」「環境」「健康」「バイオマス」「エネルギー」の5分野を教育研究活動における挑戦領域として位置づけ、研究と社会貢献に積極的に取り組んでいる。外部からだけでなく、内部からも本学教員のさまざまな実績を



表彰式会場の様子＝2018年度ホームカミングデーより



受賞者の記念講演に聴き入る来場者＝2019年度ホームカミングデーより

中から、学長が最終的に決定し、受賞者を表彰する。高野学長はこの賞について、「農大貢献賞を受賞された方には、今後も教育・研究において社会的な貢献につながる活躍を期待したい。また、後進の育成にも力を入れ、次の世代へと繋げていってほしい」と受賞者に期待を寄せる。

「食料」「環境」「健康」「バイオマス」「エネルギー」の5分野を教育研究活動における挑戦領域として位置づけ、研究と社会貢献に積極的に取り組んでいる。外部からだけでなく、内部からも本学教員のさまざまな実績を

TheNEWS
東京農大
SPECIAL
特別号
EDITION

東京農業大学
世田谷キャンパス 大学本部
大学院・応用生物科学部
生命科学部・地域環境科学部
国際食料情報学部
厚木キャンパス
大学院・農学部
北海道オホーツクキャンパス
大学院・生物産業学部

4月・7月・11月 発行
編集 東京農業大学学長室
〒156-8502
東京都世田谷区桜丘1-1-1
<http://www.nodai.ac.jp>

今年度の受賞者詳細
②・③面(特別編成紙面)
「農大サイエンスポート」/ 研究発信のハブに……④

SNSでも
情報発信!
東京農大はソーシャルネットワークを通じて大学の情報をお届けしています
Twitter @nodaipr
Instagram tokyonodaipr

今年度最初の教育懇談会 オンライン開催

東京農大では、コロナ禍により断念せざるを得なかった教育懇談会の代わりに、7月4日、オンライン教育懇談会を実施した。第一部「全体懇談会」、第二部「学科懇談会」、第三部「学際懇談会」の3部構成で、15名の保護者等が参加した。第一部は「しっかりした講義」「学生に寄り添っていた」「他学科受講が分かりやすかった」など、もちろん「資料は授業前に配って」「もう少しゆとりを進めてほしい」といった改善を求める声もある。そのいずれもが、学生、教員の双方にとって「良い授業と研究上の目的」「教育目標」とともに、次のような3つの方針を定めている。「①卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)」「②教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)」「③入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)」である。

本学教員は、これら3つの方針を実現できるような授業を行うことが求められている。この方針のもとで全体的な授業の質、教育の質を上げることを目的に、高評価を得た教員に授与されるのが「ベストティーチャー賞」と「ベストレクチャー賞」だ。

選考には、実際に講義を受講した学生たちによる授業評価アンケートが使用されるため、受講者の声が直接届くこととなる。「身近な内容で楽しかった」「しっかりと講義」「学生に寄り添っていた」「他学科受講が分かりやすかった」など、もちろん「資料は授業前に配って」「もう少しゆとりを進めてほしい」といった改善を求める声もある。そのいずれもが、学生、教員の双方にとって「良い授業と研究上の目的」「教育目標」とともに、次のような3つの方針を定めている。「①卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)」「②教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)」「③入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)」である。



①カメラに向かい話す高野学長②モニターを使い教育活動報告をする夏秋副学長

東京農大厚木キャンパス内で収穫されたジャガイモが7月13日、厚木市立病院に贈呈された。病院内で贈呈されたジャガイモは、高野学長から医療従事者の方々に感謝の気持ちと共にジャガイモが手渡され、写真、受取書が手渡された。

厚木キャンパス産ジャガイモ 病院に贈呈

東京農大厚木キャンパス内で収穫されたジャガイモが7月13日、厚木市立病院に贈呈された。病院内で贈呈されたジャガイモは、高野学長から医療従事者の方々に感謝の気持ちと共にジャガイモが手渡され、写真、受取書が手渡された。

厚木キャンパスでは、ジャガイモの栽培が盛んで、今年度も収穫されたジャガイモが、本来であればデザイン農学科1年生の実習として使われる予定であった。ジャガイモを育てた御手洗助教は「新入生と手掘りができなかったことは残念ですが、収穫したジャガイモが食品ロスとならなかったこと、そして地域の役に立てて嬉しいです。また早く学生たちと活動できる日が待ち遠しい」と話す。

コロナ禍の中、地域に根差した大学として地域に貢献する活動のひとつとなった。



厚木キャンパスのジャガイモ畑



2020年度の東京農大貢献賞は、生体捕獲されたエゾシカの短期飼育に関する研究によって、相馬幸作教授(生物産業学部北方園農学科)が受賞しました。今回の受賞について「正直、驚いている」と感想を述べる相馬教授に、自己紹介を含めて研究内容、今後の目標、学生へのメッセージなどを語ってもらいました。



エゾシカの群れ-根室エゾシカ牧場調査で

生産者、関係者の方々に感謝

受賞には正直、驚いていますが、私の教育・研究の取り組みについて評価いただいたことに感謝申し上げます。私の研究は、生産者の方々や関係者の方々の協力なしには成り立ちません。ご協力いただいていた皆さまへも感謝いたします。

私の出身は北海道北見市です。平成元年に北海道オホーツクキャンパスが設立された際、幸運にも一期生として入学し、博士課程修了までエゾシカの飼養に関する研究に没頭してまいりました。大学院修了後は、農業改良普及員(現、農業改良指導員)となり、北海道職員として利根町や根室市の酪農家の方々や地域の発展に貢献できるよう努めてまいりました。平成17年4月から緑があって現在の北方園農学科(旧、生物生産学科)に奉職し、現在に至ります。

進学時は漠然と関心が高かった農業について学ぶことを選択しましたが、聞くことを見ることすべてが新鮮でした。進学時は漠然と関心が高かった農業について学ぶことを選択しましたが、聞くことを見ることすべてが新鮮でした。

古くからの知恵を受け継ぎ有効活用

今回の受賞の経緯となった研究テーマは、生体捕獲されたエゾシカの短期飼育(一時養鹿)に関する研究です。古くから、エゾシカをはじめとする野生動物による農林業被害が深刻です。北海道でもエゾシカの個体数が爆発的に増え、農林業被害が深刻です。その対策として、従来通りハンターによる個体数削減を進めてきたのですが、駆除個体の処理やハンターのモチベーションを上げるために、2015年にエゾシカの有効活用事業が開始されました。農大では有効活用の一つである一時養鹿と有効活用を中心に協力をしてきました。

一時養鹿とは冬期間に囲い、民などでエゾシカを大量に生きたまま捕獲して牧場に搬送し、一定品質の鹿肉生産を目的に最大半年間の短期飼育し、食肉として市場流通させるシステムです。このうち、牧場の短期飼育に関する事業を中心に基礎データを得る研究を続けてきました。これらの取り組みは、平成19年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム「エゾシカから学ぶ環境共生と地域産業の連携」(通称、エゾシカ学)として採択され、学生教育だけでなく北海道のエゾシカ有効活用事業の一端を担うこととなり、これを契機として北海道のエゾシカ有効活用事業をサポートしてきたと考えています。ただ個体数削減をするのではなく、古くからの知恵を受け継ぎ、有効活用することで限りある命を無駄にせず、保全と生産の両立を目指す姿勢はSDGsの理念にも当てはまるものと考えています。

今回の受賞の経緯となった研究テーマは、生体捕獲されたエゾシカの短期飼育(一時養鹿)に関する研究です。古くから、エゾシカをはじめとする野生動物による農林業被害が深刻です。北海道でもエゾシカの個体数が爆発的に増え、農林業被害が深刻です。その対策として、従来通りハンターによる個体数削減を進めてきたのですが、駆除個体の処理やハンターのモチベーションを上げるために、2015年にエゾシカの有効活用事業が開始されました。農大では有効活用の一つである一時養鹿と有効活用を中心に協力をしてきました。



④ 飼料調製作業 ⑤ エゾシカ搬出作業

私の研究は学生たちの活躍あつてこそ

現在、一時養鹿は過渡期を迎えています。個体数減少、生息地の分散、捕獲困難地域への移入など、これまでの対策が影響しています。しかしながら、エゾシカによる農林業被害が減少して行くわけはありません。次のステップへの移行が求められています。今後は、エゾシカの有効活用事業を支えてきた方々が、次のステップへ移行するための対策に協力をしていきたいと考えています。

私は学生時代、生物産業学部の一期生として、右も左もわからないまま大学生活を送っていました。しかし、勉学以外に学んだことは、苦労すれば自分の経験になること、新たなチャレンジの糧になること、失敗も成功も、必ず自分の糧になること、学生たちの活躍がないと成し得ないことばかりです。卒業論文研究や学位論文研究などで自ら行動し、私の研究を支えてくれた在学生と卒業生への感謝の意を伝えたいです。

新たな動物資源活用で畜産の多様性を

未利用動物資源の活用として、エゾシカとエミューに関する研究に取り組んでいます。わが国の食料の消費構造は、私が生まれた昭和40年代に比べ、畜産物の消費が高くなっています。しかし、昨今の家畜の感染症の影響は看過できず、国内の畜産物の生産に影響を及ぼすことにもなっています。このため、食肉など動物資源の多様性を考えるため、エゾシカやエミューなどの新たな動物資源の活用が、畜産の多様性のヒントになればいいと思っています。

私の主な研究テーマは新規動物資源としてのエゾシカの飼養管理に関する研究です。北海道オホーツクキャンパスにある飼育施設を活用し、エゾシカ飼育や生産物である肉の評価など、さまざまな研究を行っています。現在では、エゾシカの活用だけでなく、そこで知り合った方々と畑に出没するエゾシカの対策に発展し、よろず相談的な研究も行っています。一方、エミューについては、主に給与飼料に関する研究を中心に取り組んでいます。エミューが生産する脂肪や卵の活用に関する研究も進められていますが、少しくも扱いやすいつけ与方法を考えられないか、そういった飼料を給与することでも研究しています。

相馬 幸作 教授 生物産業学部 北方園農学科

2020 受賞者8人を紹介します

受賞の感想、授業の概要、学生への皆さんへのメッセージなど、各位のコメントも併せてご覧ください。

ベストティーチャー賞



松林 尚志 教授 農学部 生物資源開発学科

野生動物の生態と行動を研究しています。個体、個体群、群集、生態系レベルで動物の生存戦略と戦略といった生きざまの基礎と保全管理への応用を学びます。フィールドは広く、キャンパス厚木を飛び出さずにはボルネオ熱帯雨林まで。授業には経験談を盛り込み、生き物と向き合い、冒険的な生を送る方をゲストに招くことも。学生には「授業での疑問点は、教員に聞くだけでなく自分でも調べてみよう」と伝えています。学生時代、「細胞の分子生物学」を項目ごとにとまどめて丸暗記。索引を見れば文章を作れるようになり、今は「今は無理。能動的な学習が未来を変えます！」



ボルネオのジャコウネコ



鈴木 敏弘 助教 応用生物科学部 醸造科学科

発酵食品製造に関わる微生物と発酵中の成分変化を研究する「発酵食品化学」を主な研究分野としています。授業では、食品製造における食品加工での原料の成分や成分変化、加工法について取り上げています。身近な話題を織り交ぜ、実際の生活と照らし合わせながら復習などをし易いように工夫しています。きっと身近な食品に対してさらに興味を持てるようになります。農大ならではの多様な講義を通していろんな事柄を学んでほしいです。ぜひ、多くの経験をさせてあげ、充実した学生生活を過ごしてください。一緒に頑張ってください！



日課は「微生物と無言の会話。」

実験動物学



*たぐいまれな実験中。

環境植物学



授業での朗らかな表情

尾畑 やよい 教授 生命科学部 バイオサイエンス学科



私の研究分野は、生殖生物学および発生生物学です。実験実習の他に、座学では動物細胞工学、動物発生学、実験動物学などを担当しています。哺乳動物を中心とする基礎・応用研究に必要なことを授業で概説しています。授業では最新の論文を紹介したり、何を勉強したら良いかわからないという学生さんのために小テストを実施したり、私も「2020 ML100」の繰返しです。学習方法として、授業の要点や理解した点をノートに整理することをおすすめします。好きなことを自らたくさん学んでほしいと思います。

浅井 俊光 准教授 地域環境科学部 地域創成科学科



私の主な研究分野の1つに環境緑化技術があります。その基礎となる授業(環境植物学)では、植物の耐寒性、耐乾性、耐陰性などを軸に、そのメカニズム、分布域や自生地、利活用を学びます。テーマ、分布域や自生地、利活用を学びます。テーマ、分布域や自生地、利活用を学びます。授業では最新の論文を紹介したり、何を勉強したら良いかわからないという学生さんのために小テストを実施したり、私も「2020 ML100」の繰返しです。学習方法として、授業の要点や理解した点をノートに整理することをおすすめします。好きなことを自らたくさん学んでほしいと思います。

望月 洋孝 助教 国際食料情報学部 国際食農科学科



私の専攻は農業経済学です。先進国と途上国の経済格差を正す目的とした「フェアトレード」日本の農山村地域の活性化に向けた「地域活性化」についての研究。現地調査や統計的手法を用いています。授業では、日常の出来事を主体的に把握しようと考えています。メディアのニュース等にも「なぜこうなっているのか?」という意識で接し、自分で調べた姿勢を重視します。現在のグローバルゼーション下では効率、便利さが向上する一方で、解決しなければならぬ問題もたくさんあります。学生の方々の皆さんにも専攻分野で独自の課題を発見し、研究を進めてほしいと思っています。

下井 岳 准教授 生物産業学部 北方園農学科



私の研究分野は動物生殖生理学で、卵子の老化が生産に及ぼす影響をテーマとしています。授業(動物生殖工学)では生殖細胞や胚の体外操作技術が、畜産や医療でどう応用されるかを学びます。「①毎年、新レックスを紹介の休憩入れつつ②楽しく」がモットーです。①は科学を学ぶうえで必須②は聞き手の集中を高めるのに効果的、③は自分が楽しくないと他人(学生)も楽しくないから、です。私たちが教員は時間をかけて試行錯誤して授業を準備します。だから授業でいたったりスマホをいじっていたりする姿を見ると悲しくなります(笑)。授業の時はぜひ、その学問に興味を持って臨んでください。

ベストレクチャー賞



武田 晃治 教授 教職課程

農学分野の先端的な知識と実験技術を取り入れた、従来の学校教育にない理科教材を開発しています。教職課程理科教育法では、中高「理科」の授業を自ら考え、模擬授業を通して授業力向上を目指します。カラフルザリガニなど、実践事例を取り入れて、授業が大きな特徴です。また、「理科」という科目を横断的に捉えたストーリー性を意識しています。学科での特色ある学びが、未来のオリジナル教材につながります。いま学んでいることが「理科」の何につながるのか、どのようか、と考えながら学び続けることの大切さを学生に伝えています。



(日本農業新聞より)



オウソウの「ラム」。実際の生き物に「直接」見て触れて、考える機会を授業に連ねています。

